シャミッソーの
『ペーター・シュレミールの不思議な物語』
—影を失った男に見られる時代—

森田　悟

はじめに

物語の主人公シュレミールは「灰色の男」の誘いにのって自らの影を失う。すなわち彼は影というものを特に重要なものとは考えず，いわば軽はずみに「灰色の男」に手渡す契約をしてしまう。これは第一の契約である。シュレミールはその中に手を入れるだけで次々に金貨が出てくる不思議な布袋と自分の影を交換してしまうのだ。しかし影がないことで街中を歩けば人並みの人間として見られず，子供からは嘲笑され，恋人からは失望され，婚約者には途方も無い悲しみを与え，その家族からはとんでもない偽善者として扱われる。結局は次々に社会から隔離され，見放されることになる。「灰色の男」は影を返す代わりにシュレミールの魂を要求する。これは「灰色の男」が求める第二の契約である。シュレミールは影を取り戻したいという思いにも関わらず，魂の譲渡をとことん拒絶する。「影」とは何なのか。この問題についてはこれまで多くの研究者がその解釈を提示してきた。[1] ここでは影の意味を第一義的に考察するのではなく，この作品の現代的な意義を解明してみたいと思う。その際，影とは何かという問いについても何らかの考察がなされることになる。

物語の冒頭

作品冒頭でシュレミールが長い船旅からようやくある港町に到着し，宿泊のための安宿を探すことが描かれる。シュレミールがどのような船旅からこの港町に到着したかは明らかにされてはいないが辛い航海（eine beschwerliche Seefahrt)[2] だったと記されている。彼の素性も明らかにされていない。海は彼にとって不安定なところであるが港に到着したことは安

らぎの得られる安息の地（Hafen）に到着したということだろうか。

シュレミールが訪れる安宿では，その番頭からは彼の身なりのためなのか，すぐさま資産のない，若者であるとみなされ，一も二もなく屋根裏部屋に案内される。港町に到着したことは彼にとって安心の場所を約束されたということではなく，そこではただ見かけだけで処遇が決まることが示される。彼がこの港町に来た目的は仕事探しであることがわかる。この港町の有力な資産家宛ての紹介状を持っていることが彼にとって唯一の希望である。翌朝，早速紹介状を持って，とある屋敷を訪れる。

屋敷は次のように描かれている。「北門の前，右手の最初の大きな，新しい家，赤と白い大理石のたくさんの柱のある家（Vor dem Nordertor, das erste Landhaus zur rechten Hand, ein großes, neues Haus, von rot- und weißem Marmor mit vielen Säulen）」。[3] この豪邸は資産のない貧乏人の身なりをしたシュレミールと全く対照をなしているかのようである。シュレミールにとってこの豪華な屋敷の所有者である「でっぷりした，自信ありげな物腰（seine wohlbeleibte Selbstzufriedenheit）」[4] のヨーンは彼が確かな社会的地位を獲得し，生活の糧を確保するための希望の人だ。彼は恐る恐る屋敷に入る。

屋敷の庭園ではその時ちょうどパーティが開かれている。その場に集う人々はシュレミールに注意を払うことはない。主人のヨーンもそこにいる人々も資産のないシュレミールが眼中にない。ようやく紹介状を手渡すことができる。シュレミールは紹介状が功をなし仕事にありつくことを期待する。しかしヨーンは「少なくとも百万のお金が自由にならない奴は私に言わせれば，人間のクズですね！（Wer nicht Herr ist wenigstens einer Million, der ist, man verzeihe mir das Wort, ein Schuft!）」[5] と言う。ここでは資産のないシュレミールと金持ちのヨーンの対比が2人の持ち物や安宿と豪邸という物質的なものの対比で鮮明である。そして金（資産）のあるなしが人間の価値を決定するものだということがヨーンの口から告げられるということになる，しかも資産のないシュレミールはそれに何らの反論もできない。ただヨーンの言葉に「仰せの通りです（O wie wahr!）」[6] と同意するだけなのだ。

社会的な変化

この作品はフランス革命を経た1813年に書かれた。作者シャミッソーは貴族の家庭に生まれたが幼いときにフランス革命の嵐の中，故郷のボンクール城をあとにしてドイツにやってきたのだ。ドイツ人でもフランス人でもないという境遇がのちに影のないシュレミールの物語を生んだことは十分伺える。しかしそれと同時に，彼自身，これまでの貴族の支配が崩れていき，市民階級が徐々に台頭してくる時代に生きていた。ドイツにとっても変革の時代に生き，そのため1800年ごろからのドイツの社会状況を幾分なりとも映し出していると見ることができる。資本主義的な社会の勃興については多くの議論が存在するがほぼフランス革命以降ドイツにおいても隣国フランスの影響を受け，それまでの身分的な社会，家柄で社会的ステータスが決まる社会に少しずつ変化が見られたと捉えることができるだろう。[7] とりわけこの物語の舞台だと推定されるドイツ北部のハンザ都市ハンブルクは早い時期から貿易等を通じて市民階級が力を持ったと思われる。またハンブルクは18世紀後半には10万人以上の人口に達しており，さらに19世紀初頭には13万人に膨れ上がり，すでに19世紀初頭にドイツにおいてとりわけ活力のある都市だった。この物語の作者シャミッソーは何度かこの町を訪れている。[8]

ヴィンフリート・フロイントの論文「金と精神」によればそれまでの身分的な社会，すなわち生まれた家柄によってある人間の社会的地位が確定してしまった社会から次第に市民階級が財をなすことによって社会的地位を高めることが可能になってきたという。[9]市民階級は財をなすことによってそれまでの封建的な国家において社会的に高い地位を占めていた貴族階級と互角になり，さらには彼らを凌駕することができるようになりつつあったと見ることができる。[10] ハンザ都市ハンブルクは市民階級が力を持つ土壌はすでに醸成されていたといえよう。

ヨーンはそのような新興の市民階級の成功者と見ることができる。彼にとって資産（金）こそが人間の価値を決める最重要なものであり，すでに述べたように資産のないものは人間のクズということになる。シュレミールもそうしたヨーンの価値観を否定できない。彼にとっても社会で金（資産）は重要であり，金がなければ社会で認められる価値のある人間にはなれないのだ。

驚かない人々

シュレミールがヨーンの屋敷を訪れると野外パーティの会場には不気味な人物がいた。物語の中では「灰色の男」と言われる。シュレミールは恐る恐るその中に入り，ヨーンとの面会を実現したのだが，シュレミールはこの「灰色の男」に出会う。パーティ会場では美しいファニーという女性が薔薇の棘を刺してしまう。すると「灰色の男」は間髪をいれずにイギリス製絆創膏を取り出す。これにとどまらない。そこの人々から所望されると，この男はポケットから海の彼方の船を見るためのイギリスのジョン・ドロン氏の最新式望遠鏡，さらには人々が座る大きなトルコ製絨毯，ご婦人たちが日射しを避ける大きなテントまでも彼のポケットから自在に次々に取り出すのだ。シュレミールは驚きのあまり，そこに居合わせた一人の若者に「灰色の男」の素性をたずねる。しかし，明確な回答は得られない。そこに居合わせる人々は「灰色の男」に何一つ驚きを示さない。男がどのようなもの，高価なものでも，大きなものでも，何を取り出すにせよ，「人々が驚かない（niemand fand etwas Merkwürdiges）」「誰も異常なものを見出さなかった（keiner fand noch etwas außerordentliches）」ということが繰り返し描写される。その一方，シュレミールは驚き，恐れる。シュレミールは不気味な驚きのあまり，この「灰色の男」から目をつけられるのを恐れ，その場から逃げ出すのだ。

しかし「灰色の男」に目をつけられてしまったシュレミールは蛇に目をつけられた小うさぎ同様，逃げ場を失う。いつの間にか「灰色の男」に道を塞がれるのだ。この恐ろしい男はシュレミールを不思議な布袋で誘惑する。袋は不思議な金袋であり，シュレミールは自らの影と交換にその袋を手に入れるという契約を結んでしまう。ここでシュレミールが契約に応じたのは彼自身の感じる恐怖心にも関わらず，その不思議な袋の効能だ。その袋さえ手に入れば金（資産）のないことから解放され，社会的地位を確固のものとさせることができるという彼の期待だ。資産がないということが社会で人間としてどのような扱いを受けることになるのか。シュレミールはその時には金（資産）の魅力にとりつかれるのだ。金（資産）の誘惑に屈することになる。

「灰色の男」との取引

この男は限りない資産を自由に操ることができる。彼は自らの資産を使えば不可能なことはない。全て欲しいものを手に入れることができる。シュレミールのような貧しい若者と契約をする必要はないだろう。だとするとこの「灰色の男」が持っていないものは何なのか。彼が所望するシュレミールの「影」は金の価値より上回るものを手に入れるための第二の取引の道具ということになる。灰色の男は金（資産）よりも価値のあるものを知っていることが示されている。彼がシュレミールに影を求めるということは影こそが社会で人と関わりあって生活する上で，人間にとって重要なものを暗示しているということだろう。しかしシュレミールは金の価値を知っていて，金を手に入れることができれば自分の安定していない貧しい生活から解放されると思ったのだろう。ヨーンの家を訪れたのも仕事先を紹介してもらい社会的ステータスを獲得するということだった。このようにしてシュレミールは金（資産）を最優先させたと見ることができる。

物質至上主義の社会

影でなく資産を優先させてしまったシュレミールには過酷な運命が待ち構えていた。彼は結局人間社会から締め出されるのだ。

だとすると影には財産的なもので得られない人間社会で生きる上でどうしても必要なものが現れていることになる。現代の私たちの世界はあたかもヨーンの庭園にいる客人たちと同様に物の豊かさに何ら驚きを示さない。私たちはともすれば物質的欲求にかられる。高価な物から日常的な物まであらゆるものが社会の中に溢れ，金（資産）さえあればすべてのものを手にすることができるかに思う。これは必ずしも誇張ではない。そして人々は溢れかえるものに対して驚かなくなっているとも言える。しかし現実には非常な貧困が存在しているのも事実だろう。物語の中では資産のある者とない者の格差が描かれているがこの現代の現実にも当てはまることである。そしてそのためにシュレミールと同様に金（資産）を得れば幸福を得られるという誘惑にかられる人々がいかに多くともやむを得ないかもしれない。

ものが豊かな世界においてはほとんどすべてのものは金（資産）によって獲得できるかのように思われるといっても言い過ぎではない。少なくと

も我々を取り巻く社会は金（資産）そしてものを優先しているかに見える。それらの物がどのようにして得られたものなのかを問うことはない。しかるべき労働を通して得られたのかなど問われることもない。そして高価なものを所有するということが人間としての価値まで規定するように思うことがあると言っても過言ではない。この物語の最終部分で，あのヨーン，あの豪邸に住み，金（資産）の価値をことさら優先し，資産のない人間の人間としての価値までも否定したヨーンの惨めな末路が描写されている。「灰色の男」のポケットから惨めな姿で取り出されるのだ。本当の人間としての価値は金（資産）を獲得するということで得られるものではないのだ。

シュレミールは結局，「灰色の男」に執拗に再三再四，求められたにも関わらず影と魂の交換に応じず，影も放棄し，人間社会からは締め出されたままのように見える。しかし彼は7マイル靴という不思議な靴を偶然手に入れて世界をかけめぐり，自然の研究に生涯を傾け，後世に自然研究の成果を残すことができる。金（資本）を追い求めるということではなく自らの生きがいを自然研究に見いだすのである。「影」がないということは人間社会で普通に暮らす資格を失うということだろう。ただしその資格を失ったとしても金に溺れることでは幸福は得られない。

物質的なものの追求では得られない精神の安定をシュレミールはすでに封建制が崩れつつあり，工業化も始まりつつあるこの19世紀初頭に見据えているということはないだろうか。このシュレミールに対する警告は現代の社会にもあい通じるものを感じることができる。ヨーンの庭園に集う人々と同様に我々は我々を取り巻く財産的な価値物に対して驚きをますます感じなくなっている。いつか惨めな姿でポケットから取り出されるヨーンにならないか。

ここで少し影について考えてみたい。影についてはこれまで多くの見解があることはすでに冒頭に示した。シュレミールは結局，影を取り戻さない，すなわち社会的な繋がりはほとんど持たない。物語中では影がなくともいわば補助人として懸命に働くベンデルという青年がいたが，シュレミールは自然研究という極めて限られた側面でのみ人間関係を維持したかに見える。そのほかの社会との繋がりを正常に維持したかは物語の中で明らかにされていない。このように考えると影には人間と人間の間を繋ぐも

の，すなわち社会的なつながりという人間としての必須なものが暗示されていることになる。不思議な布袋の譲渡人である灰色の男も金（資産）を自由に操る能力はあるが，シュレミールからだまし取った影は所詮借り物の影にすぎず，人間関係を繋ぐ能力には欠如し，孤立した存在だということになる。影は取引対象にはなじまない，それぞれの人間の固有の財産なのだ。

おわりに

物質至上主義の社会の財よりも魂の重要性を解くこの物語は人間の影の喪失という，いかにもメルヘン的な手法を用いたものであるにも関わらず極めてリアリスティックな側面を持つと言える。物語に登場する金持ちのヨーン（John）はその英国式名前からも当時の資本主義的な金（資本）を重んじる人物を想起させる。また英国製望遠鏡，英国製絆創膏なども当時の市民階級の台頭を暗示するものだと見ることができる。このような資本主義社会への移行はゆっくりしたものではなくむしろ加速度的なものだった。急速な社会の変貌の中でともすれは自己を見失う人間が影のないシュレミールに映し出されているかに見える。

注

1）影関連の解釈：①シャミッソー自身が故郷フランスのボンクール城を幼くして去り，異郷の地ドイツで暮らすという体験が影のないシュレミールに反映しているという解釈（19 世紀の実証的研究に多く見られる）②すべての市民的堅固さと人間の帰属の象徴（トーマス・マン）③市民的見せかけの諸価値（die bürgerlichen Scheinwerte）（ヴィルペルト）④個人の意識によって生きられなかった面，個人が認容し難い面（ノイマルクト）⑤資本主義的な社会から放り出された人間（フォイデル）。このように影については諸種の解釈がなされている。

①については「私はドイツではフランス人であり，フランスではドイツ人，プロテスタントのところではカトリック，カトリックのところではプロテスタントである。----- 貴族的な人たちのもとではジャコバン党員，民主主義者のもとにあっては貴族，アンシャン＝レジームの男なのである。どこ

にもふさわしくない。いたるところでよそ者である」(Chamissos Werke in einem Band :Aufbau-Verlag ,Berlin und Weimar 1980 XV) とシャミッソー自身によって述べられていることから解釈に一定の根拠を見いだすことができる。②はシュレミールが影を失うことで人間社会から締め出しを受けるという点で一定の理解ができる。③についてはシュレミールが影を失ったままだが植物研究を通して社会的貢献を果たすことができ，その意味で影を見せかけの価値としての意味に過ぎないという解釈は可能だと見ることはできる。④はフロイトの心理学に基づくもので影には内向的な，現実には現れていない人間の内面が示されるという。⑤は時代的な特質，資本主義的な社会との関連を視野に入れる解釈であろう。

2) Adelbert von Chamisso: Sämtliche Werke in zwei Bänden, 1982 Bd. II S.23.

3) Ibid:S.23.

4) Ibid:S.23.

5) Ibid:S.24.

6) Ibid:S.24.

7) エリック・ミラン　山下範久訳：資本主義の起源と「西洋の勃興」藤原書店　2011，同書 15 ～ 84 頁参照。

8) Freund, Winfried: Chamisso Peter Schlemihl Geld und Geist Parderborn/ München. 1980 S.26-27.

9) Adelbert von Chamisso: Sämtliche Werke in zwei Bänden. München 1982 S.23.
すでにその一方で 1800 年頃のプロイセンではインフレ傾向も認められたという。ナポレオンに対する敗北，フランスの占領分担金の要求により貨幣相場は下落し，今日までは金持ちだった者が一夜にして貧しくなるというような資本主義の脆弱性も見られたという (S. 15.)。

10) Ibid:S.24.

テクスト

Adelbert von Chamisso: Sämtliche Werke in zwei Bänden. Hrsg. von Werner Feudel und Christel Laufer. München 1982

アーデルベルト・フォン・シャミッソー『影をなくした男』岩波文庫，池内紀訳 1985

参考文献

Wiese, Benno von: Chamisso. In B. v. W. : Die deutsche Novelle von Goehe bis Kafka. Düsseldorf 1956. S.97-117.

Freund, Winfried: Adelbert von Chamisso, >Peter Schlemihl<, Geld und Geist Paderborn/München 1980.

Wilpert, Gero von: Der verlorene Schatten. Varianten eines literarischen Motivs. Stuttgart 1978.

Mann, Thomas: Chamisso. In: Adelbert von Chamisso: Peter Schlemihls wundersame Geschichte. Berlin 1911.

Schneider, Rolf: Wirklichkeitsmärchen und Romantik. Bemerkungen zum Werk Adelbert von Chamissos. In: Aufbau 13 (1957) Neumarkt, Paul: Chamisso's Peter Schlemihl. In: Literature and Psychology 17 (1967).